

BTT-900は、デジタルビジネズフォンやIP電話も含めて、モジュラーコネクタを使用する現行のあらゆる電話機に対応する電話用発信機です。

使用方法

セットは簡単です。電話の受話器と電話機本体を接続しているカールコードを取り外し、その代わりにBTT-900をつなぐだけです。

カールコードの両端にはモジュラーコネクタが付いています。外すときは、つまみ(写真1参照)を押して、コネクタを引けばOKです。接続するときは、そのまま押し込めば、カチッと固定されます。

細線のついてるコネクタを写真1のように電話機本体側に、もういっぽうを受話器につなぎます。

トランスミッターボックスは、付属の固定用マグネット(写真2参照)を使って、機の側面や下にセットし、細線を電話機の側面にはわせるようにすれば目立ちません。

トランスミッターボックスをコンピューターのすぐ近くにセットすると、ノイズが入る場合があります。このようなときは、コンピューターからできるだけ離してください。

トランスミッターボックスの中には、単4電池2本と送信ユニットが入っています。ボックスカバーは切り欠きにドライバーをあてて、こじることで外せます(写真2参照)。

電源スイッチはありません。送受話器を電話機から上げると電源が入り、送信が行われます。送受話器を元に戻せば、発信が停止し、電源が切れます。

電池寿命は、単4アルカリ電池を使用した場合、連続77時間(計算値)です。

●外寸/トランスミッターボックス：45×65×25mm・カールコード33cm・ボックス～カールコード接続線70cm●重量：87g(アルカリ電池含む)●電源・電池寿命/単4電池(1.5V)×2本・77時間(アルカリ電池・連続使用での計算値)・38時間(マンガン電池)●送信チャンネル/UHF帯A・B・Cの3種類●接続と発信/受話器を電話機本体に接続するカールコードを、BTT-900のカールコードで置き換えるようにセットする…受話器を取り上げると発信し、戻すと発信が止まります

トランスミッターボックス



受話器に接続する

77時間も連続して電話を使用することは考えられず、電池は断続使用で、電気容量がいくぶん復活しますので、実際の使用可能時間はこれより伸びます。

1日に合計3時間、電話を使用する状況を想定すると、77÷3=25日間…概算で1か月程度は電池交換は不要ということになります。

あらゆる電話でOK

現在はアナログ回線、デジタル回線、光ファイバーなどいろいろな電話回線があります。デジタル回線では電話用発信機を接続できても会話を聞くことはできません。

ただしこれらの回線でも最終的には今まで通りの電話機につながります。となると音声の入口と出口、つまり、マイクとスピーカー→受話器はアナログのままです。

BTT-900が受話器のところに接続される理由はここにあり、コネクタが合いさえすれば、どんな電話機でもOKという理由でもあります。

UHF電話用発信機 "デジタル電話対応" BTT-900

UCR-120GX、UCR-500EXは発信機からの電波の有無を検知して録音を行いますので、機械まかせの効率的な録音が簡単にいきます。

ビジネスホンは通常の電話機とはかなり異なりますが、これも受話器部分は普通の電話と同じです。つまりBTT-900はIP電話だろうが、ISDN電話機であろうが事実上すべての電話に対応するということです。

受話器が直結されている黒電話ではダメですが

無人自動録音

電話用発信機には無人自動録音機が必須です。いつ行われるかわからない通話をずっと待つことは、時間のムダです。

受信機に音声駆動設定にしたテープレコーダーを接続するという手段もありますが、確実性に欠けます。



写真1 BTT-900接続状態

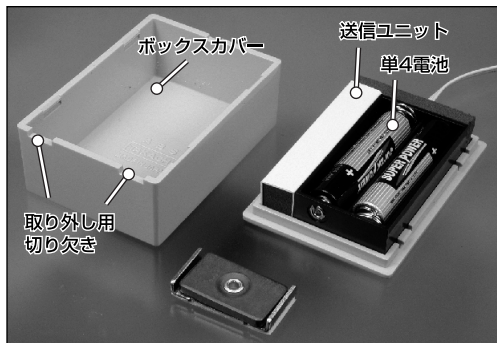


写真2 トランスミッターボックス